スキーと山

第三十三號

札幌 スキーと山の會 發行

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
大正十三年十二月三十一日印刷納本

大正十三年一月一日發行

第三十三號目次

記事

氷の彼方の友へ　加納一郎（一）
最も印象深かりしスキーの思出（六）
雪の分類に關する卑見　加納一郎（一六）
獨逸スキー映畫を見て　岡村源太郎（二〇）

寫眞

これでもスキー家だよ（瑞西）（八）
同（諸威）（一〇）

大正十三年一月發行

氷の彼方の友へ

加納一郎

一九二三年一月一七日畏友板倉勝宣は立山で死んだ。

おい板さん。

君が死んでからもう一年になる。

俺はあのときアルプスやヒマラヤが一時に消えてなくなつた様な氣がした。

君は今頃、針の山でステムボーゲンでも畫いてゐるか。それともあの腰の低い直滑降かい。

こつちはそののち鯰がくしやみをして東京の家が澤山ぺしやんこになつた。それで君の方も一時に賑かになつたらう。

少しをくれて大杉も行つた。

吉祥寺の立嶽院殿勝義廣宣居士の墓も少しづれた相だ。誰れかゞ行つてそれを直して來た。

一周忌だから何か書けと云はれたが、俺には君をこの誌上へ浮びあがらすだけの才能がない。それで君の古い手紙を載せてもらふことにした。迷惑だらうがしんぼうしてくれ。

札幌を引上げ後第一の手紙

大正十一年四月十六日付

「東京はがまにたかつた蚯蚓の樣な動き方をして居る。どれもこれも調つたきちんとしたなりをして小さくこせこせと動きまわるのを見るとなさけないのやら笑しいのやらで、猛烈な動き方をして居る町の中を一人一人の動作を注意しながらながめて歩くと色々面白いものを見る。動物園の猿がハイカラになつて大きなオリの中で動いて居るのとちがひない。

天氣はいゝ。電車は人をこほしながら走る。こういふ所を見るとシュワイツへ行つて牧夫にでもなる氣がしきりに起る追々そつちの計畫でもたてようと思ふ。その内槇さんにも會ひたい、非常に、おとなしい人で、新聞なぞへ出るのをいやがつて困つて居るそうだから原稿はその氣もちに對して賴むのは失禮だと思はれる。

松方にきいたら鎗は雪が柔かで、ちつとも緊張しなかつたそうだ。近衞は僕の學校のではなく曉星のだそうだ。その外ケイオーの三田君等か立山から劍を縱走した。藥師に行つた人も居るが雪が深かつた上に人夫が居たたまれないで逃げだそうとしたので歸つたそうだ。その内又リュックをかついでそこらを歩きたいと思つて居るが浪々の身で金がないからとても遠くには行けそうもない。借りた金はぢきかへす、今日は一寸出かけるから二三日中に送るよ、寫眞は松方のには餘りいゝのがない、追々あさつて見る。そつちの寫眞もできたら賴むぜ、又だすよ」

Das Wunder des Schneeschuh's を見たときの手紙。文末の假名は札幌の友人のニックネイムである。その多くは板さんがつけたもの。板さんは命名の秀才だつた。

大正十一年五月十六日付

「昨夜活動をみた、昨夜はカーボンが悪くて暗かつた。主催者の手落だよ。今夜又見に行く。昨晩注意して見たら山から下る時に用ひて居るのはスティアニャだ。直滑降も己のやつたようにスピードがでると腰かけをやるらしいて!!!

フィルムの價は、七万圓とか八万圓とかで手が出ない。會社はクルツプ・エルネマンだ。クルツプとは大砲をつくつて居た會社が平和になつたので色々のものをつくりだしてエルネマンとくつついて、かくの如き名の會社となつたものらしい。北海道のウゾームゾーがいいかげんの所で天グになつて居るのに大いに藥になると思ふからどうにかしたいものだ。

時機をまつのだね。山とスキーから交渉して見たらどうか。奬勵をカンバンにして居るからいゝかも知れない。己は今相手の奴と一面識がない上に唯の浮浪人だからケン井がない。昨夜は東君とあつたし吉田君夫婦、チャメゾーにあつた。東君は保險會社に行つて居るそうだ。

（此間岡見の所でモクと平井と大河原と己と會合した。めしを食つて歸つて來た。岡見はむきになつて學校へ通つて居る結構な事だ）

この寫眞を冬の前にやられたら氣がふれるかもしれない山の方は槇さんが一寸説明してくれた。世界無比の辯士だらう今日は晝から槇さんの所へ遊びに行つて夜又見に行く。あんまりムキになつて氣が狂つてはいけない。ホラだと思つて氣を靜めてくれ。そつちからこそ東京に歸つた奴にいらいらさせるべきのを。こつちからつられて、じりじりしては北大スキー部のケン井にかゝわるだらうから。（實はこゝで意地の悪い笑い方をニタリとやる所なのだがなー）ハギシリゴロー、エラピヨン、バク、ヒヨー、クン、コツ、トン、コタ、ナメクヂ、タヌキ、インネカのタグヰによろしく」

大正十一年六月十七日付の手紙

今は、つゆの最中で氣持がよくない。

「樺太行は君が行くとかトンか誰かスキー部の奴が行けば行きたいと思ふ。もし無理がなく通過する樣なら賴んでもらひたい。

其前に北カマオネをやらうかと思つて居る。がどうなるかまだ調査中だ。

東京へ來たらよらないか？

時々ケイオーの連中と會つては、金をもうけてスウィスへ行く夢ものがたりに時を過して居る。

仕事なぞは何もないから唯のらりくらりとして居る。

毎日出歩くから僕の處へ來る時は一寸電話でもかけて呉れ（下谷三〇二九）さよなら

かの兄　勝宣

大正十一年十月一日付の手紙。此は槇さんと共に北海道に來る前その打合せの用件で書いたものだ

「均さんに會つて一緒に槇さんの所へ行つて相談した。それで槇さんは先に北海道を歩いて十月十二日か十三日頃札幌へ行く事にして十四日、十五日を講演にあてる事になつた。僕は十日頃たつて幻燈の種板を持參する事になつて仕舞つた。この忙しい身体に何たる災難だらう。(中略)もしかするとケイオー連が一人か二人一緒に行くかもしれない(中略)札幌と小樽とをすまして後函館でやれる樣に盡力を頼みたい。日取りは廿日に仙臺へ行かねばならぬから十五日から十九日の間がいゝ。學生の時にこういふ盡力をする事は大いに大切だから學校等は休んでやるべし。そつちへ行つたらどんなにづうづうしくなるかわからないから今から覺悟をするがいゝ。

何しろヘル槇を打出のこづちに使ふといふ札幌のクマを相手にしてはなまな事は出來ない。槇さんの保護の爲にでも出かけずばなるまい。

それはそうと函館でやる時の幻燈機械の有無を聞いて置いてくれ。もしなければ札幌からもつて行くさ。勿論山とスキーの誰かが出張するのは當然云はずと知れた事さ。何ヒマ人ばかりだ時間つぶしにこまつた男がうやうや居るからちつとも、さしつかへはない。

己は十日頃たつよ。夜の十一時につくのだつたら電報をうつから御迎に出て御下宿に案内するがいゝ。手落のない樣にしないと失禮だよ。」

大正十一年十一月下旬頃山の道具の小包と共に送つて來た手紙

「Laterne, Huitfeldt Bindung, Langriemen Ring, Steigeisen, & gurten.

以上だけ送れる Steigeisen は少しおくれる Steigeisen は二ツ送る。金は己の所へ送つてくれ。稅金が二三・〇〇かゝつたから按分比例で割りあてた。

己はこの冬は八甲田の方へ行くつもり。しつかりすべれへちまのおばけ。」

大正十一年十二月五日のはがき死ぬ冬の計畫を一言云つてゐる

「手紙を今受取つた。金は今とてもない。山の道具代から引いて送つてもいゝよ。シュタイグアイゼンは其内送る一つは十二月中にもう一つは一月になる。ロープは今まにあはない。つまらない本を一冊送る。己は一月アルプスへ入るかもしれない。それで尙さら金は送らぬ。あばよ」

七日に例の活動フィルムを大學でやる」

同年十二月下旬　岡部君が青山温泉へ來るときに託したもの。これが最後の手紙であつた。いつもに似ず、ユーモラスでないのが何となく意味ある樣に思はれる。

「合宿は大變なニギヤカサの事だろう。今度僕の友人の岡部長世君が札幌に用事があつて行く事になつた、そしてこの機會に北海道の雪を味ひたいそうだから今年は他にお客さんも多い事と思ふから一緒に便宜を計つてあげて貰ひたい。さぞ御忙しいでありませうが。今年は豫選で大分御キンチョウの事だらう御奮闘を祈ります。僕は今年は白馬、立山、穂高。の何れか二つ許りは行く積りで居る。競走は己の柄でないからね。

東京には大分いゝスキーが入つて來てゐるが皆馬鹿に高い。今年から大分ヒュットフェルトが流行しだした、己もはきたいが金がたりなくてやめたよ。

それから三十日頃から立つて行く人で慶應の西川君が居る。どの位滑れる人か知らないが紹介して呉れとの事だ。いづれ正月一日頃札幌で山とスキーの會を訪門するかも知れない、不在ならしかたがないがもし誰か居たらよろしくとり計つて下さい。

例のフィルムは未だに努力して居るから直接間接を問はずその内そつちへ廻る事と信じて居る。そのフィルムの外にワィテルタイルが來て居る。これも行くだらう

松川五郎様

加納一郎様

板倉

最も印象深かりしスキーの思出

福地義二郎

Kさん。

私がスキーを離れてからもう三年になります。そろ〳〵四回目の冬が間近かになりました。私の長い札幌の生活――殆んど山とスキー以外には收穫がなかつた私の生活――も遠い昔の過去となりました。今でもアルバムを暗じて居る樣に其の當時の出來事をよく記憶して居ります。而し其の當時の感想が今のお若い方に、何の參考になりませう。其の時受けた印象がどれだけ皆さんの興味を牽く事が出來ませう。今から話をすればお笑ひ草となるばかりでございます。時は遠慮會釋もなく過ぎ行きます。其の間に變化もあれば進歩もございます。私等が眞劍に考えて計畫した登山も今では散歩する程度で行はれて居りませう。私等が瑞喜の涕を流したスロープも今では全く顧れずもつと〳〵好適地が發見されて居る事と想像して居ります。

而し私が何と云つても忘れ得ない山は蝦夷富士でございます。前後三回登山しましたが、登山毎に變つた事を敎えて呉れました。殊に私にとつて尤も印象深かつたのは第三回目でございました。明方雪明りで靜々と無言で雪を踏んだ氣分は二度と味ひ得ません。顏に觸れた雪によつてスキーの滑る音によつて將た又樹木と雪の見境によつて僅かに五感を感じた其の當時は只其の日の幸運を希ふのみで誰しも一言も發しませんでした。此の嚴肅なそうして眞劍な氣分はとても今では味ふ事が出來ません。

一合目二合目と登るに從つて氣温、雪質、天候、傾斜等有ゆる條件が違つて居たのも私にとつてはよい經驗と智識を與へて呉れました。一回目、二回目と登山の回數を重ぬるに從つてあの山に對する觀念は段々と變つて來ました。而しあの山程私が氣を許し得なかつた山はございません。後では一本松の邊まで多少ハンビリした氣分も出ましたが殆んど一日中神經を尖らかして終始しました。危險に對する恐怖心は最初の登山に感じただけでございましたが今でも油斷ならぬ山だと思つて居ります。一日の行程を了へて

初めて安心する登山は一寸外にはございませんでした。あの山は私に努力なる物を眞から敎へて呉れた樣に考えて居ります。殊に三回目の登山には貴方も御存じの樣に二度も同じ行程を繰り返して初めて火口壁に辿り着いたのでございませう。私が頂上に達したのもあれが最初の最後でございました。あの時にMさんNさんGさん等が居られたから初めて出來たと思つて居ります。私はあの樣な努力は今後一寸出來ない氣が致します。殊に其の日頂上近くで烈しい吹雪に顏を打たれた苦しさは今でも忘れ得ません。吹雪の晴れた一瞬間に内壁を見出した其の當時の嬉しさは悲しさと同時に湧いて來ました。勝利の悲哀其の物の樣に。

春の初めに白い雪を頂いて靜かに立つて居る蝦夷富士を想ひ浮べるとあれ程私等を苦しめたとは到底想像がつきません。

私に自然の大きな力を暗示して呉れたあの蝦夷富士は今でも倶知安を通る旅人の旅情を慰めて居る事でございませう。

私は到底蝦夷富士を忘れ得ません。

高橋翠郊

御無沙汰致して居ります。御誌の益々御發展の事を非常に愉快に思つて居ます。

今度「最も印象の深かつた想出を……」との事でありますが、永年スキーをして居りますと、愉快な事悲しい事など種々とありますが、可成り漫性になりつゝあるので想ひ出すのに困難です。

其内全体を通じて忘れる事の出來ない事は、富士山腹の滑落です。自身で負傷する計りでなく、友人の酒井薫君を無くして終ひました。之は大正三年一月四日午前十一時半から十二時迄の間です。

……私が負傷して居る。酒井君は再び砂走りの大斜面を滑べり落ちて行く。富士の大自然は重く音もなく、同行の誰れもが來ない。大斜面の内には落ちて行く酒井君と私丈けである。――其時は無論酒井君が死んで居ようとは思つて居なかつた――其淋しさ、便りなさ、シーンとして悲しみなどは通り越して居た。次の瞬間には上に居る筈の金井佐藤、和田、川崎、山口等諸君の内、二人を氣使つて、亦アノ崖を落ちて來はしまいか、若し落ちて來たらば、杖もスキーもなく負傷して居る自分は、何として救助の方法を講じよう、落ちて來なければ良いが……と谷底と迄は言へぬが五六百間下に横になつた儘動かずに居る酒井君を思ひ崖の上を氣使つた時の、心の忙しさ。早く酒井君の所に行かうとして五六十間も歩いた時、堅氷に差しかゝり進退極まつ

これでもスキー家だよ（西瑞）

て亦再び上と下との事を心配されるもどかしさ。焦り立つとは此事だつたらう。

私の滑落中頭部の下向きを一度水平迄位に取り返したが再び頭部下向きとなつて終つた。今からあれを思ふと頭部の上方廻轉には手丈けで足部の抵抗を行はなかつたら……と思はれる。——私はスキーを思ふ時、あの事件が直ぐに浮かんで來るので古い話であるが書きました。

次ぎには雪の陷落線の内に三人共が圍まれた事です。夫れは信州野尻の講習會を濟ませての大正二年三月十日の陸軍紀念日の午後一時半頃。飯綱山中八合目位の大森林中であつたから、事もなく濟んだのでせう。

其朝は七時柏原を出發して五里の道を飯綱の本山脚に到着したのは正午だつたでせう、同行は和田宗吉君と清水恭君との三人だつたが、天氣はよし、惜しいから一時半迄登行しようと（北斜面）勇んで登りましたが六合目以上になると埋雪が割合に深く急斜になつて思ふ通りに進めない。一時半になつたが漸く八合目位にしか行けない。と、ザッと音がして体が少し低下した樣な氣がしましたので、後の和田君に言ふと、音がしましたと言ふ。變だと思つて見廻すと上方に一米位して巾が二三分位の割目がズーッと三人を圍んで居る。一人宛輕るく歩き出して登行すると亦、ザッ、と言ふ。見ると前と同じ樣に三人が圍はれて居たが都合三度此雪の陷落に合ひましたが二時半迄無理に登行しましたが漸く九合目位だつたので其所から引返したが、アレが若し森林で無かつたら雪崩の誘因になつて、偉い目に會つて居たでせう。尻切りの樣ですが茲で失禮します。

（一二十一）

東北帝大　額田敏

山とスキーに關する印象を書けとの命に接し誠に恥かしい次第でありますがスキーに就いては極めて少ない經驗しかありません爲めに申述べる樣な深い印象は腦裏に殘つて居ません只山と云ふものに對して言ふことの出來ない憧憬から今日まで機會ある毎に山に親しんで居ります。貴誌山とスキーによつて諸大家の山岳に就いての深い研究の發表を讀んで此上もなく深い興味を持ちます。

十一年三月藏王山に登り頂上に立ち鳥海、月山、朝日岳と連る雪の山々がギラ〳〵と輝いて居るのを眺めた時今度の冬は仙臺附近の山々を登ることを約した、其の友は病の爲めに鄉里に歸つた、自分一人が脾肉の嘆に其の年を暮した。今迄は同じ實驗室内で一人が何處の山へと云へばすぐ話はまとまり只二人で何處へでも出掛ることが出來たのに今年は其の友が居ない！淋しい！と思つて居た、ところが

これでもスキー家だよ（諾威）

スキーを持つて五色に行つて居る間に色々と同志が集り又今度の冬も雪の山に行くことが出來た。が而し所が仙臺と云ふあまり雪のない所で歸つて居て一週間に一度の日曜に出かける位であるので北海道邊りの雪國とはまるで話が異つて居るのは御承知あり度い。

正月に泉岳、二月に安達太良山、他の一組は岩手山、三月に藏王、四月に吾妻これは自分は餘義ない事情で不參、殘念で耐らない、五月船形山、これで雪の山は一先づ打切り。其間五色へは日曜毎に出掛けた。

其の折り〳〵の印象は何と書いて宜しいか書き表はすことが出來ない。泉岳の朝紅の光線が山の雪に照つて度々本で讀まされたモルゲンロートこれだアクまで青い空に赤い山！振り返るとギラ〳〵する雪に二條の線が長く續いて其の端は細く〳〵なつて木の間にかくれて居る、未だ風は吹かない、全く靜かだ、世にも奇しく美しき光のアヤである山の人のみが受け得る幸（サチ）である。斯かる美しき祝福ばかりは何處でも與へられるものでない、山靈が一度其の威を振へば寒氣と吹雪とを興して小さき人間は一たまりもなく或は斷崖からはね飛ばされ或は雪に埋もれて後は僅かに冷たき其殘骸が谷の底、雪の中になつて荒し過ぎし後捜索隊によりて籠にかつぎをろされる樣になる。斯かる迄にならないまでも寒氣と飢との爲めに生死の間を幾度か彷徨して弱り果てた軀を人界に運ばれる事が往々ある。

安達太良山の麓岳温泉は冬には温泉は出ない、只雪の下を流れて來る冷たい水が浴槽を滿たして居るばかりで温泉宿も誠に淋しき山中の一寒村に過ぎない。玆を未明に麓の林道を上つて灌木帶を通り越し下るとした岩の散在する邊りから風と雪とでスキーを脱いだ事が幾度かあつた。スキーと共に軀が風に弄ばれて四ツバイとなつて上つた、邊りは一面の氷雪と變つた寒暖計は零下十三度を示す睫に吹き付けた雪は固くなつて生長して目を覆ひ視界の妨けとなつて甚だ苦しむ、此の頂上で逢つた吹雪も温泉まで下つて山を眺めた時には只怪しい雲が山の頭を掩ふて居るばかりで下界は穩かな日和であつた。

松川五郎

「よう―し」と遠く下の方で聲がする、

「おい、いゝつてさ」

「よしッ」妙な形をした黑い塊は全身の力を兩股の間につき立てたストックにそゝいで、ジジーと云ふ音を立てゝ氷の樋を坂にした樣な樵道の底を吸ひ込まれる樣に滑り下りてゆく。坂を一曲りすれば、もう影は見なくなり音だけがあの神秘的な、青白い月に照らされたお堂の樣な森林の中

に、だんだんかすかになつてゆく。坂の上では早く下から合圖をしてくれゝばいゝがと待つてゐる。

「まだかなァ」

「長いんだらう」先に行つたものが完全に坂を下りきらなければあぶなくつて滑り出せないのである。

「よう―し」とやうやくきこえる。

次のものは、同じ樣に暗の中に、かすかな音を殘して消えてゆく。かうして狼の遠吠でも聞こえてきたら、さぞ似つかわしいと思はれる森の中で、自分の番を待つてゐる間にその日一日の色々な思出が湧き上る、姿見池の邊の大きなうねりを見せた素敵な粉雪上の滑走、白銀の塊を引き裂いた樣な旭岳の爆烈火口、そのぎざぎざした粗面に陽がかゞやいて、まぶしいばかりに眞青な大空にぬけ出た美しい景色、さてはそばへも寄り付けない程の焚火、そのまわりに動く山ごの黑い影、さうしたものが淡い滿足に落ち着いた胸に操り返へされる。と

「よう―し」とほらあなの底からでも響く樣に下から聲がかゝる、愈々自分の番が廻つて來た、文字通りにU字形の堅雪の樋の底を、兩方のスキーで頑張つて、一生懸命に杖で制動したつきり、のめる樣になつて飛んでゆく、それこそ思出もなにもブツトンじやつて、たゞ重力の引くにまかせて、傾斜がゆるくなつて自然に止る迄滑りつゞける。

下では自分達がどんな姿でをりて來たかも忘れて、後から來る奴の形がおかしいと云つてワイワイ云つてゐる。又坂に來る「よう―し」「よし」を繰りかへして、又しばらくの立ちんぼと、幻想の樣な思出が始まる、旭の下のスロープは素敵な大さと、申分のない傾斜とをもつてゐて、しかも硼酸の樣な粉雪で覆はれてゐた、板さんと二人で池の中に滑り降りて、左と右にクリスチャニアをやつたつけ、湯の澤の上の直滑降は餘り長くて足が痛くなつたつけ……

又滑り出す、一つの曲を廻ると坂の途中にK君が止つてゐるのが、先を瞶める眼に這入つた時の驚き、緊張は極度に達したが先へ進むより外どうする事も出來ない、K君は思ひがけない上からの音を聞きつけ、たちまち動く影を見つけた時、緊張しきつた面持ちで、振り返つて上を見るやいなや横にしてゐたスキーを巧みに樋の流れる方向に向けたかと思ふと眞直な坂を鼠の樣に滑り出した、その「コレハコレハ」と云ふ滑り出すカツコウは實におかしかつた。何んと云ふ譯はなくたゞ無性におかしくなつたが笑ふ事も出來ない程緊張しきつて、僕もK君の止つてゐたところで非常な苦心を以て、やつと止つた、安心と同時にこらへてゐた笑が上と下で湧き上る。K君は先きに行つたI君がころんだのを氣づかつて一寸した逃げ道をみつけて止つてゐたのだつだ、そして下のI君と話し合つたその聲を上に居た

僕が例の「よう―し」を間違へて出發したのが、そうした一幕を演じさした事があとから解つた。それもいつまでも忘れられない一九二二・一・九旭岳をやつた時の氣持のいゝ思出と結びついた月夜の森の中の思出として殘つてゐる。

臺灣士林　櫻井芳次郎

私はシーロイファーでなく單なるシーカメラーデンであつたので、やかましいテクツニクを一向修得しやうとしなかつた。故に此頃の樣にめぐるはしい程進んで行く若い人々に參考や爲めになる想起の何者をも持つてゐない。

冷氣、雪、結氷、は勿論降霜にさへ合はない環境に置かれてみると遠い北の國の事がさつぱり見當がつかなくなつて來る。

唯エキゾーストエルギーー迄消耗し盡して激しく動き廻つた過去の Delrie を一帖のアルバムに殘して來たに過ぎないが、アルバムの一頁一頁をめくる毎に飛び出して來る快活なシーカメラーデンの顏を見ると、文字通りに胸がぞくぞくして來る。こいつは此の日は僅か一卵力だつた。此の日はおれがラツセルをしてやつた。こいつは熊笹の葉で野糞をふきやがつた。この新米があすこでスキーを折つてシンガリの機關車を困らせた。此のずるい奴はいつも辨當なしで誰彼れとなく食糧をかつぱらつて……後で涼しさうな顏して直滑降をやつてゐる。此の小男は吾等と共に三角山の裏で僅か數間のなだれに辷り込んで「生死の間を往來した」なんてほざいたくせに、卒業前には一種の權威になつてゐるなんて。此の男だよ初めて毛布でおれがセイリングスキーを敎えて吳れて輕川から寄宿舍裏迄とつぱしておき乍ら棒のつつぱりがたらんなんて先輩のおれを、あごで使つた奴だ。此のE博士は數名と共に石狩に走つて狂の旅館に泊つた、晩に蛙を呑んだ蛇と蕎麥の食ひ競爭をした男の蛋白質と炭水化物分解酵素をまちがつた科學的シャレを聞かして吳れた。此の寫眞はエゾ富士を極めた時の記念、頂上に僅か二、三分しかをれなかつた。吹雪と共に消えてしまつた萬歲の跡に何が殘つたかい。でも札幌へ歸つた時、驛前のビールを呑んだ味は忘れない（今でもサツポロビールを呑んでゐるから）

此頃東京の震災の時丁度淺草の活動寫眞を見てゐた人が臺灣に歸つて來たが其の人の、驚異の緊張から拔け出たほんやりと淀んだ眼を見るとすぐ北海道の熊打ちのだらけきつた眼付を思ひ出す、十呎内外迄熊の立上り來るを待つ緊張の跡なのだらう。此れに似た眼付きを月曜日よく學校でシーカメラーデン否ロイファーの人々に見る。猛烈な直滑降の連續で痲痺しきつた跡の眼付きだ。ビューと一本……

出た、底の方の雪がどんぐん盛り上がつて來る。ひどい衝動だ。空氣の抵抗、竟に摩擦熱が高じて發火點に達する。赤い鼻先きから燃え初める。ムツツエ、スウエーター、トラウザーと順次消える。竟に靴だけがビンドングに縛りついた儘永遠に平行せる一對のスキーが走り去つて行く……ざつとこんな氣持ちだ直滑降のきわどい奴を一本やると。此れも忘れられん。

本田治吉

エルステルアインドウルツクとでも申しますか、誰しも初めて味つた事が、一番深く、そして永く〳〵心の中に殘るものです。私の今尙忘れられぬ事は、それは私の初めて山に引張られて行つた時の事でした。

キモペツ岳とムイネシリ岳を連絡する試みでした。私はその時の心の緊張と、苦しさとが今尙忘れられないのです

その日は――大正十一年一月七日――ほんとに雪が深かつた。土地の人の話では、その四五日は風は少しもなく、終日降り通しだつたとか。私達の一夜の宿を願つた農家も雪に埋れてしまつて、唯ストーブの煙筒丈けが、僅かに頭を出して居た。丁度穴の中から熊が飛出す樣に、八つの頭がピヨコ〳〵と飛び出した。雪は相變らず降つて居る。そして雪はやつぱり深い。まだほの暗い中を登り初めた。

何んほ歩いても〳〵も道は捗取らぬ。「最ふ一里近く歩いただらう」と振り返つて見れば、まだ物の十町と來て居らぬ、ラツセルの苦しいつたらお話にならぬ。スキーをはいて居て雪が胸の附近までもこゞく。丁度三人目位に居る人が、普通の日のラツセルと同じ位の苦しさだ。先頭に立つ人の恰好は、丁度やせ馬が重い荷を背負つて、急な坂を登らんともがく樣子を思ひ出させる。一寸小形のA君等は、頸の附近まで埋つて泳いで居るこ云ふ有樣だ。何事にも負ける事の大嫌なN君さへも、(その時のリーダーをされた)「こんな深い雪は生れて始めてだ」と云つて居られた。私達は、ひたすら木の下を選んでそして何時もなら、ラツセルは時間で交代するのが、此の日丈けは「君彼の木の所までやれ」と云つた風に、僅か五六間しかない所をそう云つては交代したものだ。

されど、斯ふした苦しさの後、やがて樹林帶も越え、氷雪帶に出て、目ざす頂上に達した時、そしてはるか己が足下に粉雪の飛んで、折りから輝く陽の光に反射して、ニジを畫くを見た時、私達は唯感激より外知らなかつた。更に進んでムイネシリ岳の頂上に近く、彼のさながらに、無生物の國――死の國の靜けさを思出せる樣な美しさの中に、何に驚いたか眞白い兎の一匹走るを見た時、私は「生命」

に對する感激を覺へずには居られなかつた。彼の偉大な自然の中に育くまれて行く、己が生命に感謝せずには居られなかつた。やがて日がこつぷりくれて、里に降りて天を仰いだ時、月が紫色に見えたのなどそれからそれこ忘れ得ぬ思出が浮び出て來る。

凡ては苦しい思出だつた。けれども美しい、そして樂しい思出である。私はこれから先、何んな深い思出を殘そうとも、此の時の樣に美しい、樂しい、そして苦しい思出は味ひ得たいと思ふ。

雪と寫眞

この月は休暇を利用してスキー地へ出掛ける人が多いやうだ。失敗、成功、樣々な思出となるものを多く經驗するであらうがこれらの思出を辿るよすがこなるものは先づ寫眞ではあるまいか、スキーの寫眞は兎角單調なグルーミーなものが出來易いこは誰でも經驗する事だがこれについて近着の英國スキー年報中に (Goshawk 氏(英人にしてツューリツヒの寫眞材料商) が寄稿してゐる。初心者への注意であるが初心者ばかりと限らない腕に覺えのある經驗家でも何かヒントを得る事こ思ふから抄譯して見る。

紀念の爲にスナツプショツトしやうこする人には固定焦點のヴエスト型を御奬めする。これが最も失敗が少い。

撮影の際は必ず陽光が被寫体に照射されてゐなければならない。そうでなければ單調なものしか出來ぬ。十二月及び一月はアメリカ式の二五・十五の方法に從ふ事($\frac{1}{25}$秒絞り16の意)遠距離の時はこの二分の一の曝寫即ち五十分の一秒でよい遠距離のものの撮影にはスクリーンがあれば申分がない、スクリーンの倍數により露出時間を變へる事は勿論である。二月三月には同じ絞りで五十分の一秒で足る前景に眞白な雪のみがあつて單調な時にはスプールを入れる。但し光線を直角又は斜めから受けて蔭影がなければその効果はないのである。畫面一杯の人物を寫すこきは絞りを明放つて二十五分の一秒の露出を要す。繰返へしていふが太陽の直射を受けてゐなければ輝しい畫は出來ない。高速度の運動体撮影も書いてあるが紙面の都合上割愛して又の機會に掲げる事にしやう。

なほ現像法はタンクを用ふる事、現像液はグリシン、メトール、ペリナールがよい、これはデル・ウインターやヘークのデル・シーでおなじみのルーターの說である。(H)

雪の分類に關する卑見

加納一郎

本誌第三十號仙波正雄君（雪の名稱に就て）及び第三十一號六鹿一彦君（雪の名稱に就ての私見）に對して私が青い嘴をいれることを許してもらひたい。

兩君がいつてをらるゝごとく雪を分類してその名稱を統一することは、われわれにとつて甚だ大切なことである。尤も名稱などはどうでもいゝたゞ滑ればそれでいゝと云ふのも一理はあらう。けれども「雪はどうだつたか」と尋ねる場合に（實によかつた）と云ふだけでは甚だものたりない。無用の事ではあらうが、私が此の問題を大切だと云ふ理由は。

一、スキーのいろいろな技術を說明するにあたつて、どう云ふ雪の場合はどう、と云ふ風に云はなければならない。即ち技術の說明上先づ名稱を統一することが必要である。

二、同じシャンツエでも雪質によつてレコードが異つて來る。勿論バーンは人工的に雪質を變ぜられるが、それにしても濕つた雪はどこまでも濕つた雪であり、之を人工的に變へることは出來ない。バーン外の狀況を以て其の競技の時の雪質を記載することはレコードに就て大いなる參考を與へるであらう。

三、山では、いつ、どこが、どう云ふ雪であつたかを知ることは後の爲に非常に參考になることである。

すべて合理的に多くの人々が協力して同じ趣味のよりよき享樂をはからうとするのには、此の雪質をあらはす所の名稱を統一しなければならないと信ずる。

而しながら此の問題は甚だむづかしいことで、正しくは氣象學や氷河學にをいて研究された上、分類して名稱を定められなければならないはづである。けれども氣象學では

明かに各種の雪質を分類しては居ない。また氷河にをいても雪から氷への推移の狀況に就ては嚴密に考究されてゐても、たゞ積つて消える間に雪が示す、いろいろな雪質についてはさう細かく分けてはゐない。また假に此等の方から純物理的に定められたとしても、われわれスキーを中心にして考へるものとは自ら更つて來るのは分りきつたことである。それ故これはどうしても吾々が定めなければならないのである。

今迄の多くのスキーの書物や、紀行文を見ても雪質をあらはす言葉は人々によつて、まちまちで同じ名稱が全く異つた場合に用ひられてゐたりする。そしてまたはつきりと此の雪の分類に就て定めたものはなく、同じ人も色々な形容詞を使つてゐる。

私の此の問題に就て云へば一九二二年一二月發行のスキー術階梯の雪の分類と云ふ項は私が執筆したのであるから大体之に云ふ通と同じい。しかし今幾分自說を補正して此處に述べて、前記兩君の說と比較しやうと思ふ。

元來雪の名稱を論ずるに當つては、降りつゝある雪と、降り積つた雪とに別けなければならない。積つた雪に就て考へることがより大切であるが降りつゝある雪もまた甚だ大きな影響をスキーに及ぼすものである。此に就ては兩君は何にも說かれてない樣であるが、私は降りつゝある雪を乾雪と濕雪とに分ちたいと思ふ。スキー術階梯では粉雪と軟雪とに分つたけれど（硬雪とあるのは誤植）粉と軟とは相對的の字でない故、廢止する。乾濕に分つことは主としてその雪の水分を含む程度によつたのである。常識的に之を說明すれば。

乾雪、氣溫の低いときに降る乾いた雪で、甚だ輕い。雪片は非常に小さく、多くの場合個々のヘクサゴナルクリスタルは獨立して落ちて來る。結合しても二つか三つ位である。

濕雪、氣溫の高いときに降る濕つた雪で、比較的重い。即ち落下速度が速い。雪片は時に甚だ大きく、多くの結晶が結合して小豆大なることもある。

氣溫の高い低いと云ふことも比較的のことで、必ずしも氷點下であるからと云つて乾雪が降るわけではない。濕度が此の兩者を分つ最も主な原因であらうと私は考へる。兎も角降りつゝある雪は此の二者に區分するだけで充分であらうと思ふ。

次に問題の積雪の分類である。

仙波君は七種、六鹿君は之を九種に分たれてゐる。私はこれはあまり多すぎると思ふ。今迄すでにでたらめと云つていゝ位亂雜に取扱はれて來た熟語を正しく分類してその各に役目を負はす必要はない、またさう精細に分けたここ

ろで、之を一々徹底さすことは困難であらう。統一されることは、日本のスキー界が一つの協會によつて連繫されてその上で約束されない限りは、用語そのものゝ持つ、普及力にまたなければならないと私は考へる。それ故出來るだけその數を少くして、速く正確に了解される樣にした方がいゝと思ふ。勿論かくその數を制限することはシュネークンデの上からはあまり好ましいことではない。むしろ出來るだけ精しく分けて、スキー家がもつと雪に對して科學的な觀照をする樣に計りたいものであるが、それは實際に無理である。それで私は比較的廣い範圍に於て用語を一通り定めそれ以上精しいことは、形容詞的字句を冠することにしてその不備を補つたらどうかと思ふ。

そこで私は積雪を分つて次の五にしたいと思ふ。

一、乾雪
二、濕雪　軟雪
三、硬雪
四、堅雪
五、凍雪

乾雪、濕雪は共に軟雪と云ふてもいゝが、此は後の硬、堅に對する爲に考へるのであつて用ひなくともいゝ。此の二者は先の降りつゝある雪の名稱と同じで、積りつゝある雪の分け方も成立する。兩君共に粉雪と軟雪とに分けられたもので私も階梯で同じ樣に分けてゐるが、粉と軟とは比較的の字でないからやめた方がいゝと思ふ。此の乾、濕の分け方は前に云つたが、仙波君は濕度によつて、六鹿君はスキーに粘着すると否とに分けられてゐるが、實際は必ずしもその分ち方通りではない。

硬雪と云ふのは風に吹きつけられて雪が固く凝集してゐるものである。此の層はスキーで踏つけると破れることもあるが、時にはその層が厚く角付けが困難なことがある。六鹿君は舊案で硬雪、新案で堅雪と云はれてゐる。私は堅雪をより堅い雪に用ひやうと云ふのである。

堅雪とは積雪が太陽に照らされて融け、再び凍ると堅くなる。その著しいものは層が厚く氷の樣な狀態となる。かゝるところではスキーの使用は殆んど不可能である。六鹿君は之を氷雪、仙波君は凍雪と云つて居らるるが、氷雪と云ふ語は判然としない。氷の樣になつた雪と云ふ謂だらうが、氷と雪とを合せても氷雪と云ふ字句をなす、また凍雪と云ふのは私は他の場合に用ひたい。

凍雪、氣温の變化に伴うて融解、凍結を繰り返す爲に雪片が融合して時に粒狀となる。暖かいときは之は粒が分離してざらめ糖狀を呈し滑走に適するが、寒いときは雪粒は固着して堅くなる。此のときは堅雪とあまり變らない。相違點は堅雪は粒をなさず一樣に氷の樣になるに反し、凍雪

は必ず多數の粒の集合であることである。

此の五種によつて大低の雪をあらはすことが出來ようと思ふ。そして尙これ以上の精細はその上に形容詞を用ふることによつて補足しては如何かと思ふ。例へば硬雪、堅雪の薄いものは表層硬雪或は表層堅雪と云へばいゝ。之によつて踏めば破れる雪質であることを示すことにする。凍雪は堅・軟いづれかを以て示せば確然とする。ざらめ糖狀のものなれば軟き凍雪と云ふ如し。

雪の名稱を定めるに就て尙考へねばならないことは、雪面と雪層との關係である。私の以上の分類は雪質のみについていつてゐるので、普通には雪質をあらはすのに積雪層の最上面の狀態を以てすることが多い。而し新しい乾雪や濕雪の下に硬雪があることもある。また雪面が波狀になつてゐる場合もある。或は乾雪と硬雪と云つた風に斑狀になつてゐることもある。此等に對して一々名稱を附してゐては限りがない。此の點に於て六鹿、仙波君の斑狀雪は私の採らぬ所である。此等は單に形容詞を以て補足するに任した方が混雜がない。

たゞ以上のうち最も考へねばならないのは乾、濕の兩者であらう。此は可なり範圍が廣い。それに硬雪と堅雪との中間とも見るべきものがある。それは太陽の照射と自重とから比較的硬くなつた場合である。此等は時間を示してその狀況を經驗から推す樣にでもしてはどうであらう。例へば新しい濕雪とか、舊い乾雪とか云ふ風に。即ち舊い乾雪であれば自重と、太陽照射又は風の作用を幾分かでも受けてゐるものであるから新しいものに比して雪層はかたく比較的にスキーの沈み方が少い。單位容積に於ける比重が大きい。

此れだけでは不十分であるかも知れないが私の雪の分類と名稱とに就ての考へは右の通りである。此の卑見を敢て呈示し諸賢の御敎示にあづかりたい。

念のためも一度揚げやう。

降りつゝある雪。
　乾雪、氣溫の低いときに降る乾いた雪。
　濕雪、氣溫の高いときに降る濕つた雪。

積れる雪
　乾雪、滑降の際雪煙りが立ち、手に握つても固まらないもの。比重は比較的輕い。
　濕雪、水分が多く凝固性に富めるもの比重は比較的重い
　硬雪、風にふきつけられて硬くなつてゐるもの。
　堅雪、雪片がとけて一樣に融合して氷又は之に近い狀態をなすもの。
　凍雪、雪片が再結晶によつて結合し、時に粒狀を呈するもの。

一九二三・一一・七

獨逸スキー映畫を見て

岡村源太郎

去る十一月十日の札幌錦座の夜を最初として、例の獨逸スキーフィルム映畫は、將にシーズンを迎へんとしつゝあつた北海道スキーランナーの血を躍らせた事は非常なものであつた。この大きな刺戟によつて、北海道のスキーランナーは初心者たると熟練者たるとを問はず、來るべきシーズンの大發奮へと志し、我々の心は異常の緊張を感じたのである。又一方スキーを今まで解しなかつた人も、そのスキーが有する驚くべき魅力に驚異の眼を見張り、或老人はこの美しいスポートに惠まれた現代の北國の若者に對し多大の羨望の聲を放つた。或は「もうスケートなんか止めてスキーをやる」といふのさへも耳にして居る。

實にこのスキーフィルムが本道内に於けるスキー普及の上に絶大の力のあつた事は云ふまでもなく、我々スキーランナーの技術の啓發に對して量り知り得ない効果を齎した

競技を除く他は殆ど全てのスキー術に亘つて、我々の進むべき道が充分に示された。スキーの先進國なる北歐に於てのスキー術は、從來は文献によらざれば單に技術の各瞬間が表はれて居るのみであつた寫眞に依つて、僅かにその一斑を知り得たに過ぎなかつた。それが今度のフィルムにより、立派なる生きたコーチとも云ふべきものに接したのである。實際生きた教示の極めて有効なることは、このフィルムによつて益々深く感ぜしめられた。文書の上には到底表はすことの出來ぬ、又寫眞に依つてもそう親切な微妙な技術の表示の出來ぬ點等は、活動寫眞によつて初めて充分に了解し得るのである。殊に高速度撮影によれるものに至つては、更に微細なる技術の研究の上には全く見逃すことの出來ないものゝせられなければならない。

要するにこの價値あるフィルムが今や我が國に於けるスキーの一中心地たる北海道にこの公開が終了し、何れ追々と全國各地方に於てもその公開の機運に近づきつゝあることは、我國スキー界にとつて非常なる喜びとしなければなるまい。今私はこのスキーフィルムの内容について簡單なる感想を述べたいと思ふ。そしてその感想も主に技術に關する方面のみに限ること丶御承知願ひたい。又既に御覽になられた方の記憶を呼び起し、何れ御覽になる丶方の參考にと、不完全な説明を加へることを許して頂きたいのである。

第一卷

第一卷は主にスキーの本質的技術に就いて、彼地一流のランナーの巧妙なる技術が現はれて居る。最初は誰しも一度は踏まねばならぬスキーランナーの未熟の時代を示すことに初まり、次にスキー術の最も根本をなす、スキーの穿き方、平地滑走、三段滑走、キツクターン及び跳躍廻轉による平地にての方向變換を示し、更に登行法として緩斜面にての電光形登行、横登行（階段登り）開脚登行及び急斜面にてのキツクターンを示してある。次に滑降及び滑降中の廻轉法即ちスウイングとして、直滑降（屈身姿勢による）全制動、半制動、ステムボーゲン、アツプヒル及びダウンヒルのクリスチアニア、クリステアニアスラローム、横滑り法、燕返し（スキーワルツ）より、ダウンヒルのテレマーク、テレマークスラローム、急坂に於けるテレマークスラロームに及び、更にジャンプターン（ドレーシユプルング）ジャンプ、電光形滑降、スケート式滑降に及んで居る

以上はそのフィルムに現はれたランナーの技術を見るに我々が現在行ひつゝあるものに比して、甚しい技術の差異は認めぬのであるが、それでもあれだけの技術をレンズの前に揃へるといふ事は今の日本のスキーにとつては容易なことでない。又クリスチアニヤ、テレマーク、ドレーシユプルング等に一日の長が認められるゝかも知れぬが、一方燕返し等は北海道に於てもあのフィルムに現はれたよりも以上のランナーを持つて居る事は確かである。クリスチアスラロームとしては、エルエステイ、浮動クリスチアニアも現はれ、又ステミングの力を可成利用する、クローズドクリスチアニアが盛んに行はれて居たのに氣が付いた。それでそのスプール等も我々が豫期した程の立派なものは少なかつたと思はれる。更にドレーシユプルングに對しては、そのターンの前後の動作よりして我々の技術も殆ど滿足に近づいて居る事を知り得た。

次にジャンプが盛んに撮られてある。練習用のシャンツエの築造法、十米乃至二十米の小ジャンプがダヴル或はシングルで演ぜられ、更に三十米、四十米のジャンプへとスキー術の極致を遺憾なく發揮し、その間にアプローチ、サ

ツツ、フライト等の解説に高速度撮影法を利用して充分の理解を與へてくれた。要するにジャンプは三十米、四十米の大ジャンプが自由に演ぜられる所を見ると、どうしても我々のジャンプより一段の進歩を爲し居ることは否定出來ない。立派なスタイルで悠々とフライトよりテレマークポヂションにランディングを終えて滑降し行く樣は、未だ我が國では到底認め得ぬ所である。こゝに於て思ふがまゝに四十米以上のジャンプを爲し得るジャンピングヒルを、容易に求めることの出來る北歐スキーランナーの幸福を羨む次第である。我國に於てもかゝる大ジャンプを完成し得るシャンツエの出現の速かならんことを且多からんことを希望する。

又この時のジャンプに於て、フライト中一旦兩足を屈けてスキーを身体に近つける動作を取つたものが現はれた。之はノールウエーではトレーケホップと稱せられて居るもので、之によつて見るに、その飛躍距離を增加する爲には餘程大膽なる手段が取られて居るやうに思はれる。又高速度撮影の際に良く現はれて居たのであるが、サツツをジャンパーは成るべくシャンツエの端に於て完成し、身体の伸び切ると同時にシャンツエを離れるといふ點に、少からざる苦心を爲して居る樣子が見えて居る。更にチャンピオンシップのジャンピングに於て、多くのジャンパーがアウトランに至らぬ所で盛んに轉倒した樣子が現はれて居り、又その轉倒の高速度撮影による動作の分解も示されて居たが要するにあれだけの猛烈な轉倒を爲すとも、ジャンパーは負傷一つせぬ所を見ると、合理的ジャンプの練習は決して危險なものでないことが解る。そして苟もスキーランナーたる以上は、必ずこの技の熟練は必要であつて、スキーの眞髓を知らんとするものには大いにジャンプを行ふべきことを敎へらるゝのである。

更に第一卷の終りにはフィルムファンを挾め、極限のスロープの滑降、斷崖のジャンプ、雪庇に於けるジャンプ等が現はれて居る。こゝに至つては觀衆は誰しも膽を冷す物凄い場面であつて、我々にもその眞なるかをも疑はしめらるゝ程であつた。然し之はそのジャンプ或は滑降の全技術の完成するまでの動作、四圍の狀態に就いて、我々の了解出來ぬ點が多く、從つて之は反つて比較的容易な技術に屬すべきものでないかとも考へられる。殊に斷崖に於けるジャンプは確かに、四十米ジャンプを爲し得る人にとつては容易なものであると思ふ。又小川をジャンプして飛び越える所もあつたが、飛躍距離四米位のドレーシユプルングもそう困難でない所から見れば、之も驚くに足らぬ事と思ふ

第二卷及び第三卷

第二卷以下は全てスキー術の實際的應用である。そして

二卷三卷は主に登山に於ける。ホテルよりギツフエルに到達するまでの行程中に起る事柄を寫したのである。先づスキーを穿き、森林中の滑走を續けて、次第に巨大なスロープへジツクザツクの伸びて行く樣子が現はれる。そこに眞のアルプの眞純の姿の連互を示し、廣大なる氷河、障壁の如く氷河を包む雪峯の連り、ヒユッテの前の夕方、望樓より望める純潔の光峯、夕暮の雲海、リツヂに物凄く卷き起る暴風等は、全て冬のアルプが有する性質を遺憾なく發揮して居る。我々は居ながらにして、暖いヒユッテの中で窓に映るアルプの生氣潑溂たる光景を眺めるやうな、又その雄深偉大の大自然の懷にさまよひ入るやうな感を起さしめられたのである。

そして三卷に於てはアルプに於けアルピニストの活躍が現はれて來る。互にアンザイレンしつゝ、ゾンディーレンによつて氷河の上を進むスキーランナーの注意深い動作、シユパルテに對する彼等の苦心、雪庇登攀に於て傑れたる威力を示すピツケルの冴え。更に四〇〇〇米の頂上に立つアルピニストの歡喜に躍る樣子、遙か低く雲海の眺めらるゝ急斜面に一歩一歩横登りを爲し行く、又スキー置場を定めてスキーと分れ更に登高へと志すランナー、之等は全てその一擧一動が冬季登山者に取つて決して見逃し得る場面の連續である。再び硬雪の急斜面にピツケルを振ふ時、メンヒ、アイガーを背にして山男がシユタイグアイゼンの快き一歩を踏みしめる時、ユングフラフ四二〇〇米の絶頂に敬虔なる感激の心もて立つ時、全て登高が齎す最善最美の悅樂を感ぜしめる。

このアルプの登山を見るにつけて、我にはかゝる登山の際に適用すべき技術に對し極めて淺い經驗を有するのみで我々の技倆を之に比較する等は到底不可能の事と思ふ。そして我國冬季登山の前途の如何に遼遠なるかは、何人もこの寫眞により一目して認知せらるゝ所であらう。更に眞に雪と山に惠まれたベルナーオーバーランドの地に多大の憧憬を持つ。

第四卷及び第五卷

第四卷は登山に於ける下降のみである。この時使用すべきあらゆる登山スキー術が、その斜面の傾斜に應じ雪質に應じ、即ちその千變万化の狀態に全く適應した手段をランナーは講じながら降つて來るのである。第三卷に於て苦心して登つた所を、ステップを切りつゝ下降する樣、スキー置場に於て再び愛用のスキーを穿いて前面の大斜面へ突進する所、殊に急斜面に於ける電光形滑降は實に壯快の極であつた。又互にアンザイレンして二人は全く一つの調和した行動を取りながら、注意深いステムボーゲンは物凄いセラクスより出でて氷河の大グビートへと進んで行く。或は

シュバルテ墜落等の危險に遭遇し、次第に山より出づる時の山核より次第に遠ざかり行く樣子が躍如とし、愈々シュバルテに惱まされ勝の氷河より出でては、ザイルを解き眞の自由の大滑降へ移つて行く。そしてタンネンの森へとスラロームの條痕が印せられて行つた。豪快なる直滑降、緩斜面にては優美のスケート式滑走、確實なるクリスチアニアテレマークによるストップ等ゝ全く我々歡衆は唸らざるを得なかつたのである。

こゝに我々の眼に着いた事としては、ランナーが殆どドレーシュプルング以外には杖を用ひぬ事である。如何なる急坂でも無杖制動廻轉或は横滑りで終始して居た。之はランナーの確實なる自信ある技術の結果であることは勿論であるが、下降の際にブッシュ等に惱まされざる限り、或範圍内にての斜面なら餘程急な所でも、杖の使用を絶對に必要としないらしい。然し下降時間を速かならしめる時、アプノルマルの雪質にあつては如何なる熟練者でも、杖使用はより有効な結果を齎すものと思ふ。

第五巻は粘着性の雪にスキーランナーが苦しむ狀態、濕雪の時に起り易いマリのやうな雪崩にオベレーターが襲はれる場面等が現はれ。之以外は凡全て森林滑走である。眞のスキーの驚異が示された。第三巻の續きとも見られ、壯麗なる森林中に直滑降スラローム等ゝ、スプールの變化し行く樣、スキーランナーが最も苦しむ足もとに立つ白煙の亂れ、或は時ならぬ雪を降らすタンネンの雪冠の下、夕暮の神祕の森の中を靜かに平地滑走して逍遙ひ行くランナーの神々しき姿、實に形容し得る語の何物もないのである。そして最後は悠然たるクリスチアニアの後に立つ白煙の中より、ランナーの姿が忽然と現はるゝ場面を以て終り、更に夕暮のマッターホルンが顔を出した。

要するに第五巻はスキー術殊にスウィングといふ方面の大活躍である。背景の美、技術の優秀とが相待つて最も深い印象を殘したであらう。ランナーも餘程雪質の惡い所でなければ轉倒はしなかつた。數人のランナーが相亂れてスラロームして行く所等を、見せつけられては、我々の今後のスラロームは平に巧妙になるばかりではいけない、一つのパーティが互に一致した滑降を爲し得るに至らねばならぬことに氣が付く。然し我々も決して悲觀することはないあのフィルムに現はれたランナーの技術に匹敵し得る人は確かに居るその匹敵し得る人はこの寫眞を見て充分の自信を得た事であらう。

この映畫の第二編とも見るべきものが去る十二月十四日東京帝大にて公開された。彼地の選手權保持達が映畫中の人物となりドラマティックに脚色されたもので面白さの點では第一編以上だとの好評を博してゐる。

終り

青山溫泉

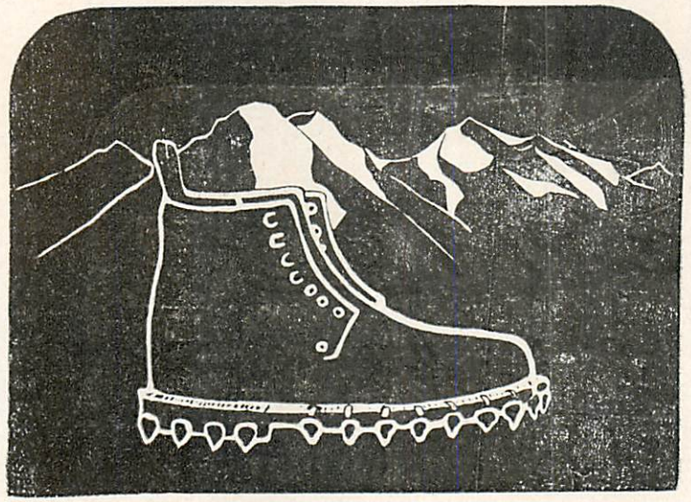
絶好のスキー地
惠れたる
雪質、雪量、地形
周到なる設備
乾燥室、スキー置場
自家用發電機

函館本線昆布驛下車
札幌より五時間
函館より七時間

豐富な積雪!!
潤澤な斜面!!
充分の設備!!

五色温泉

山形縣南置賜郡山上村
板谷驛にて下車
宗川旅館



登山靴とスキー靴

東京市本郷區四丁目角
太田屋靴店
電話小石川七四一二番
振替東京六一二七番

遂に雪の時期が參りました。

スキーの御用意は是非當店へ

◇　◇

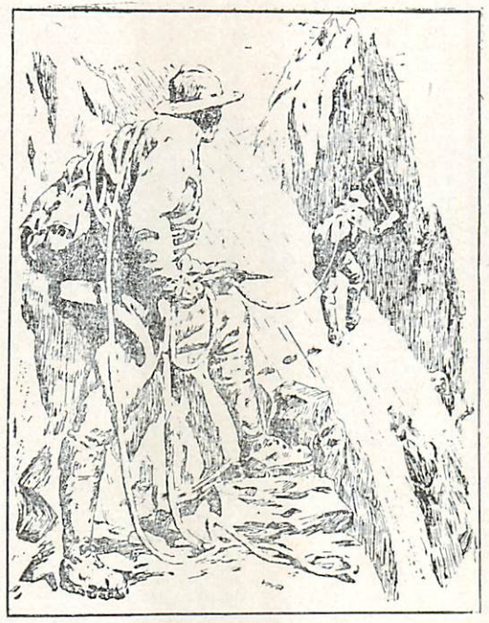
小樽市稻穂町大通

梅屋運動具店

電話九八六番　振替小樽七〇番

特約店募集

目錄進呈



秩父宮殿下

賜ひたる榮の

上納品御買上
嘉品御賞
覽品御台
上品御獻

美津濃式堂山用品を是非御召用あれ

專門大商店

東洋最大

美津濃

東京神田神保町

大阪
東京
神戸

運動用品店

廣田戸七郎著

スキージヤムピング

四・六版　一八〇頁　銅版五葉　凸版拾數葉　定價　一　圓

スキージヤムピングのみについての文献は本邦に於ては勿論歐洲に於ても、その類を見ないところであつて、ジヤムピング競技が旺ならんとする現今此の一書を播かれ以て御研鑽に資せられんことを切望します。

發行所　山とスキーの會

◆山とスキーの會は北海道帝國大學スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せらるる人、登山に趣味を持たるる方が一人でも多くお讀み下さることをお願いたします。

◆雪の善惡、山の高低にかゝはらず諸方面から御寄稿下されんことをお願します。原稿紙御申越次第お送り致します。

◆原稿は、、○を一字とし、行を更めるときは一字下げること

◆記事中の數量は全て、C.G.S.系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

定　價　金參拾錢

＊前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

＊御送金はなるべく振替にてお願致します。

＊六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

＊前金の切れた時には最後の分の包裝にその旨記します。次の御送金あるまで配本を見合せます。

＊本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、緣故の有無にかゝはらず雜誌の代價は頂きます。

大正十二年十二月三十一日印刷
大正十三年一月一日發行
（毎月一回一日發行）

編輯者　赤松動
印刷兼發行者　長谷川敦
印刷所　札幌市北一條西二丁目　札幌印刷株式會社
發行所　札幌市北六條西六丁目　山とスキーの會　振替口座小樽八四九五番
賣捌所　札幌市南一條西四丁目　札幌堂書房　電話三二三番、六三八番　振替小樽八八〇八番

青山溫泉

絶好のスキー地
惠れたる
雪質、雪量、地形
周到なる設備
乾燥室、スキー置場
自家用發電機

函館本線昆布驛下車
札幌より五時間
函館より七時間

大正三年十月二七日第三種郵便物認可
大正十二年十二月三十一日印刷納本
大正十三年一月一日發行

（毎月一回一日發行）

山とスキー 第三十三號

定價金參拾錢

La Gazeto de la Monta kaj Skia Klubo

No. 33. Januaro 1924. Sapporo. Japanujo.

MIMATSU
WINTER SPORTS
OUTFIT

米國ウインスロー製 スケート
獨逸製 スキー

○右新荷着仕候 ○御申越次第カタログ進呈
○其他服裝具豊富

東京本郷
赤門前
合名會社
美滿津商店
電話小石川局八四五二〇七一